STAGE 3

文学的文章II

解答(P 14 ~ 21)

③	(ア)	4	(イ)	1
	(ウ)	(例) ボクを手伝うことは助け合う気持ちを育てるが、ボクの自立をさまたげるので、手伝うのを止めさせようとも思うから。(54字)		
(ロ)	(エ)	1	(オ)	3
	(カ)	2	(キ)	1
	(ク)	4	(ケ)	3

- ③ (ア) 写真の説明からつかむ。隣の女の子が体をのけぞらせていて顔がひきつっているのに対し、「ボク」は満面の笑顔で写っている。この対照的な様子からわかることである。つまり、「ボク」には何も特別な意識はないが、まわりの人間は、どう対処しているか戸惑っている様子が、一枚の写真からもわかるということである。
- (イ) 先生としても、何も「ボク」のことがわからない状況であったため、「ボク」の心を傷つけてしまわないかと心配して、どう対応すべきか迷ったのである。
- (ウ) 生徒たちがボクを手伝うことで、生徒たちの間に級友と助け合う気持ちが芽生えることは教育上有意義にみえるが、ボクを手伝うことは「待ってれば誰かが助けてくれる」という甘えの気持ちが芽生え、ボクの自立を妨げる結果にもなりかねないので、生徒に手伝わせるのは止めさせたいと思うが、それにはどうすればいいのか悩んでいる。
- (エ) 道具箱にかかわるできごとで、「ボク」が「ワァーッ」と泣き出した後、先生が考えている内容が、「この子は、困難な作業をさせられることにはなんの抵抗も示さない。しかし、まわりの友達と区別されたり、一緒のことができなかったりすることを極度に嫌がる」と書かれている。この内容をまとめた選択肢を選ぶ。

STAGE 5

説明的文章(社会科学)

解答(P 29 ~ 34)

③	(ア)	4	(イ)	1	(ウ)	3	(エ)	1	(オ)	(例) 山村という言葉のイメージが、暗いものから魅力的なものに変わってきたように、言葉には一つの時代の価値判断が付与される。(58字)
(カ)	2									

- ③ (ア) 空欄の後では、前で述べたことからの具体例が述べられているので、事例を示す接続詞の「たとえば」が適切である。
- (イ) 傍線部直前に「自由な精神をもつ」とあるが、傍線部は「自由な精神をもつ」ことの障害になっている事柄を指している。傍線部の直前にある文の内容に注目し、「その言葉をつくりだした時代の考え方に支配される」ことから逃れるという内容を導き出す。
- (ウ) 傍線部の直後の文に、一つの言葉には、その言葉のもつイメージ(印象)が含まれているという具体例が述べてあるので、3が適切である。
- (エ) 傍線部の直後の文に、時代によって、ある言葉がどのように受けとめられているか、つまり、どのように価値基準が決まるか、が述べられており、また、その価値基準にもとづいて、その世界における意味の体系が決まると述べられているので、1が適切である。
- (オ) 中心になるのは後段落であるが、前段落には、「山村」のもつイメージの移り変わりについて書かれているので、前段落を事例として後段落につながるように制限字数内でまとめる。
- (カ) 2の「その言葉が使われる地域で変わる」の部分があてはまらない。

- (オ) 「悪戦苦闘」とは、何かうまくできなくて、非常に苦勞している様子を表す。ここでは、3の「四苦八苦」と同じ意味となる。1の「七転八倒」は、苦しみもがく様子、2の「五里霧中」は、まったく先が見えない、つまり見通しの立たない様子、4の「暗中模索」は、よく分からない状態の中を、手探りで方法を見つけようとする様子を、それぞれ表す。
- (カ) 傍線部直前の「家来だと勘違いして」という表現から、「大名」や「王様」が家来を引き連れている様子を表すものがあてはまると見当をつける。直後に「王座転落」とあることから「王様みたい」があてはまる。
- (キ) 傍線部の直後に「それは次のような理由からだ」とあるのので、理由が書かれている段落をきちんと読み取るようにする。「まずは……優越感」「もうひとつは体力を考慮しての面」とある。すなわち、電動車椅子を使うことで、変な優越感を持たせてしまうことと、体力が衰えてしまうことへの配慮から、先生は、電動車椅子の使用を禁止したのだとわかる。
- (ク) 二段落後に「ボク」が想像しているところがある。電動車椅子を使わないようにしたおかげで、自力で移動できるようになったこと、生活の幅が持てて、気持ちの上でのゆとりを持てたことが書かれている。
- (ケ) 高木先生の指導は、一見厳しいように見えるが、それは、真に「ボク」の将来を考えてのことであり、それこそが、真の「優しさ」なのだという意味である。
- (コ) 高木先生の信念が書かれているところから考える。先生は「今、何をしてやるのが本当に必要なのかを考えていくのが、私の役目なのだ」という信念を持っていたことが本文中で述べている。この内容にふさわしいものを選ぶ。

- ① (ア) 1 (イ) 4 (ウ) 2 (エ) 2

解説

① (ア) —— 線1の直前に「いひければ」とあるので、その前の発言を受けていることがわかる。直前の発言で、勝ち侍が「三日間身を清めて、二千度参詣したことを渡すという旨を仏に伝えて、さらにそのことを文書に書いて渡すならば受け取る」ということを述べているので、「よきこと」の内容はこの部分を指すと考えられる。したがって、1が正解になる。

(イ) 「しれ者」とは、「痴れ者」と書き、愚かな、ばか者という意味になる。語釈に忠実な4が正解になる。

(ウ) —— 線3の直後にある「目には見えないものではあるが、誠実な気持ち尽くして受け取ったので、仏もしみじみとあわれにお思いになったのであらう」と人々が言い合った内容を踏まえて考えることから、正解は2となる。1の「仏が気の毒に思った」、3の「仏は感心した」という内容は文章中には書かれていない。同様に、4の「本人しか受けることができないもの」は、ご利益が受け渡されている文章内容と一致しないので誤り。

(エ) 文の全体像や主張に関わる問題は、最後の段落に注目すること大切である。ここでは、『誠実な気持ちを尽くして受け取ったので、仏もしみじみとあわれと思いいったのであらう』と人々は言い合った」という点から考える。1の「負け侍の機転の素晴らしさ」は結末部分と一致しない。3の「仏のご利益は平等に分配される」とあるが、負け侍はご利益を得るばかりか、むしろ不幸になっているので、これも間違いである。4の「誠心誠意渡さないと災いに見舞われる」についても、「渡す」ときの心構えではなく、「受け取る」ときの心構えについて書かれているので、正しくない。したがって、正解は2になる。

【口語訳】

今となっては昔のことだが、ある人のもとに宮仕えしている年若く身分の低い侍がいた。何もすることがないままに、清水寺に人のまねをして、千度詣を二度行った。その後まもなく、同じ主人のもとにいた同じような侍と双六を打ったが、ひどく負けて、(賭物として)渡すようなものがなかったところ、(相手の侍が)激しく責めたので、思い悩んで、「私の持っている物は何も無い。ただ今蓄えている物としては、清水寺に二千度参詣したということだけがある。それを渡そう」と言ったので、そばで聞く人は、だますのだと、ばかげていると思っただけで、この勝った侍は、「(それは)とてもよいことだ。渡すのならば受け取ろう」と言って、(さらに)「いや、このままで受け取るとはしたくない。三日後に、この事情を(仏に)申し上げて、おまえが渡すという内容の文書を書いて渡すのならば受け取ろう」と言ったので、「(それは)よいことだ」と約束して、その日から精進して、三日たった日に、「それでは、さあ清水寺へ(行こう)」と言ったので、この負けた侍は、「たいへんな愚か者に出会った」と、おかしく思っただけで、喜んで一緒に参詣した。言った通りに文書を書いて、(仏の)御前で師の僧を呼んで、事の次第を(仏に)申し上げさせて、「二千度参詣したことを、だれそれに双六(の賭物)に手放した」と書いて、与えたので、(相手の侍は)受け取って喜んで(仏を)伏し拝んで、退出した。

その後、いくらも(時間が)たたないうちに、この負け侍は思いがけない事(が原因)で捕まえられて牢獄に入ってしまった。(これに對して、文書を)取った侍は、思いがけない裕福な家柄の妻をもらって、とても富がたまわって、官職にもついて、とても豊かに暮らした。「目に見えないものではあるが、誠実な気持ちを尽くして受け取ったので、仏もしみじみとあわれとお思いになったのであらう」と人々は言い合った。